

(様式第5号)

生体模擬サンプルを用いた高速X線CT撮影の基礎的な検討(3)

**Feasibility study of fast X-ray CT imaging
using simulation living-body samples (3)**

馬場理香, 米山明男

Rika Baba, Akio Yoneyama

(株)日立製作所 研究開発グループ, 九州シンクロトロン光研究センター
**English Research and Development Group, Hitachi Ltd.,
Kyushu Synchrotron Light Research Center**

1. 概要

従来の放射光を線源とする単色X線CT計測系では1回転の撮影に数時間を要しており、撮影中に被写体が乾燥や熱で変形すると言う課題があった。これに対し、本研究では高強度の準単色X線光源と高速・高感度なX線カメラを組み合わせることで、高速なX線CT計測系を構築した。また、この高速CT計測系を用いることで、高精度の擬似単色断面像を算出するデュアルエネルギー処理法を開発した。前回の実験では、準単色X線に対して金属フィルターを用いて得られた2つのエネルギーで生体模擬ファントムを撮影し、得られた断面像から各エネルギーの擬似単色X線断面像を算出した。今回の実験では、同じ生体模擬ファントムを単色X線CT計測系で撮影し、擬似単色X線断面像と比較評価を行った。擬似単色X線断面像の値は単色X線断面像の値と線形の関係にあり、開発した高速X線CT計測系を用いてデュアルエネルギー撮影が可能であった。

Conventional monochromatic X-ray computed tomography (CT) imaging system using synchrotron radiation (SR) has a problem that measurement time is long and living-body samples are transformed by drying and heat. A purpose of this study is to develop a fast X-ray CT imaging system. Our novel imaging system uses powerful polychromatic SR X-rays with metal filters and high-speed and high-sensitive X-ray imager. We also develop a dual-energy imaging method to accurately calculate the quasi-monochromatic images by using the fast X-ray CT system. In the previous experiments, the quasi-monochromatic images of simulation living-body samples were calculated from the polychromatic SR X-rays images acquired in two kinds of the energy adjusted by the metal filters. In this experiment, the monochromatic images of the samples were measured and compared with the quasi-monochromatic images. The pixel value of the quasi-monochromatic images of the samples was directly proportional to that of monochromatic images. As a result, the developed fast CT system enables dual-energy X-ray CT imaging.

2. 背景と目的

X線 Computed Tomography (CT) は、被写体内部の構造を非破壊で3次的に観察できる方法であり、医療診断や製品の不良検査などをはじめとした多くの分野で幅広く利用されている。本法はX線が被写体を透過する際に生じた強度の変化を画像化しており、密度に関する情報を得ることができるため、密度変化を伴う形状や構造など形態の観察に優れている。3次元画像を得るためには、被写体を1回転させて様々な方向からの撮影像を取得する必要がある。これに対し、これまでの放射光を線源とする単色X線計測系では1回転の撮影に数時間を要しており、撮影中に被写体が乾燥して変

形したり熱で変質すると言う課題があった。

本研究では、この課題を解決するために、高速な読み出しが可能で検出感度の高い面検出器と、短い露光時間で十分なX線量を照射する準単色X線光源を用いた計測系を構築する。また、この計測系を用いて2種類のエネルギーの準単色X線で撮影した断面像から、他のエネルギーの擬似単色X線断面像を算出するデュアルエネルギーX線CT計測法の検討を行い、生体模擬サンプルの3次元観察を試みる。

3. 実験内容 (試料、実験方法、解析方法の説明)

従来の単色X線計測系では、全波長のホワイトの放射光を二結晶分光器を用いて単色化する(図1)。これに対し、本実験では、全波長のホワイトの放射光を金属フィルタを用いて準単色化する(図2)。今回、放射光による準単色X線を利用することでX線の強度不足を解消し、さらに高速・高感度なX線カメラと組み合わせることで高速なX線CT計測系を構築した。実験に用いた検出器の性能を表1に示す。単色系では、シンチレータ、オプティカルファイバー、空冷sCMOS検出器から成る高感度ファイバーカップリング型検出器(Zyla)を用いる。一方、準単色系では高輝度のX線を検出可能とするために、シンチレータ、レンズ系、cMOS検出器から成るレンズカップリング型検出器を用いる。CT計測では、入射X線に対して試料を回転させ、角度毎に投影画像を撮影し、得られた投影画像のデータセットを再構成演算して3次元のCT断面像を求める。本実験では、エネルギーの変更を金属フィルタの種類と厚さを変更することにより行う。また、この計測系を用いて構成元素が既知の物質で構成した生体模擬サンプルを撮影し、CT断面像の評価を行う。



図1 単色X線によるCT計測系

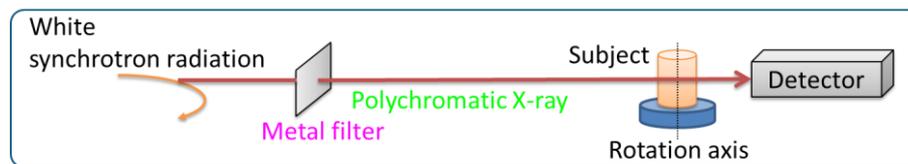


図2 準単色X線によるCT計測系

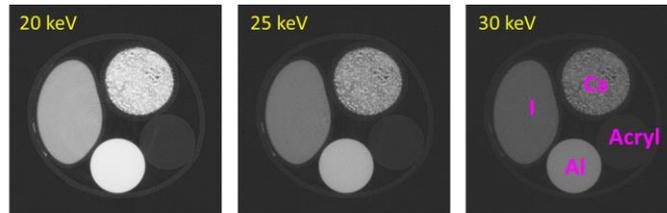
表1 検出器の性能

	Monochromatic X-ray	Polychromatic X-ray
Type	Fiber-coupled imager	Lens-coupled imager
Pixel size (μm)	6.5	3.25
Number of pixels	2560 x 2160	2560 x 2160
Field of view (mm ²)	16.6 x 14.0	8.3 x 7.0
Frame rate (f/s)	100	50
Scintillator	CsI (100 μm thick)	CsI (15 μm thick)

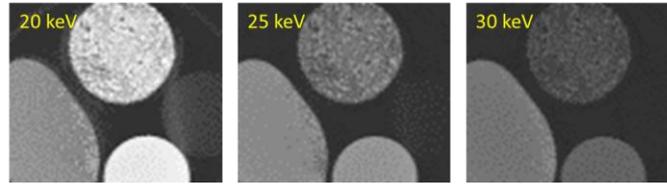
4. 実験結果と考察

図1に示す単色X線CT計測系を用い、生体模擬ファントム(アクリル円柱, アルミニウム円柱, 3倍に希釈したヨウ素造影剤を詰めたチューブ, 粉末カルシウムを詰めた円柱を直径約10mmのプラスチック円柱に詰めたもの)を撮影し、単色X線CT断面像を算出した(図3(a))。さらに、この2つの単色CT像から、開発したデュアルエネルギー処理法を用いて各エネルギーの擬似単色X線断面像を算出した(図3(b))。擬似単色X線断面像においてファントム内の各要素の平均値を求め、単色X線断面像の値と比較した結果、擬似単色X線断面像の値は単色X線断面像の値と線形の関係であった(図4)。これにより、開発したデュアルエネルギー計測法を用いて疑似単色CT断面像を

算出可能であることが確認できた。



(a) 生体模擬ファントムの単色X線CT断面像(計測画像)



(b) 生体模擬ファントムの擬似単色X線CT断面像(計算画像)

図3 生体模擬ファントムの CT 断面像

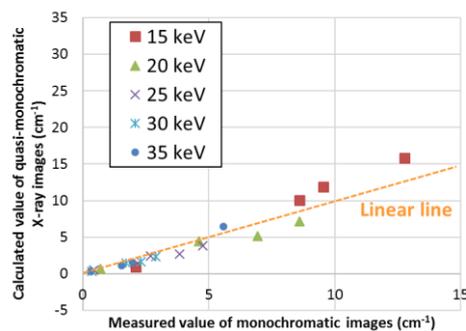


図4 生体模擬ファントムの CT 断面像における画素値

5. 今後の課題

今回の実験で、開発した準単色X線を用いる高速CT計測系により、擬似単色X線断面像の算出が可能であることが明らかになった。次に、より生体に近い模擬ファントムを用いて高速CT計測系の評価を行う。

6. 参考文献

- [1]米山明男,馬場理香,第12回九州シンクロトロン光研究センター研究成果報告会
- [2]米山明男,馬場理香,第79回応用物理学会 秋季学術講演会,21p-235-6

7. 論文発表・特許

ECR2019 proceedings DOI:10.26044/ecr2019/C-2040,10.26044/ecr2019/C-1218

8. キーワード

準単色X線, 金属フィルタ, 高速CT, デュアルエネルギーCT

9. 研究成果公開について

① 論文(査読付)発表の報告

(報告時期: 2019年7月)